SF的読み解き
子どもという風景

第八回 「もしも……」のいろいろ

堀内 守

1 条件法

「もしも……だとしたら」という言い方をいろいろなものごとにあてはめてみる。

もしも空の色が赤かったら、
もしも月給があがったら、
もしも月が鏡であったなら
もしも空を飛べたなら、
もしも雲が白砂糖だったなら、
動物がことばを話せたなら、
もしも太陽がなくなったら、
……

とにかく、何でもこの条件法によって、別の世界へ連れていってもらうことができる。

これをばかばかしいと言って拒否してしまうと、その入り口は閉ざされてしまう。もったいない。

でも、それを拒否する人だって、たったいま挙げたい

くつかの「もしも……」のうちに思い当たるものを発見できるだろう。たとえば、「動物がことばを話せたら」という仮定は、ちょっとひねると、物語の世界になる。モモタロウに向かって、犬は口をきいたはずだ。それを疑いもしないで聞いていたのは幼なかったからという理由に尽きるのだろうか。物語という枠がそうさせたのではなかったろうか。天地草木、ことごとくが語っているような――つまり、それだけ心が躍動していたといえないか。

歌もそうだった。歌詞のなかで、犬も木も花も語っていなかったろうか。歌の『野ばら』のなかの野ばらは少年とみごとに語り合う。しかもかけ合いに近かった。

擬人化である。

いや、詩全体が死せるものを活かす力をもっていた。

万葉の歌人はうたった。「妹がかど見む、なびけこの山」。妻と別れて旅に出た。いよいよその姿が見えなくなる。この峠に立って、この山をなびかせて、わが家の門にたたずむ妻の姿を見たい、というのである。

この「なびけ」という命令形は、まずもって、祈念の激しさをよく示している。

「呪術」だと割り切る人でも、この意味には心うたれるのではあるまいか。

精神と理性

ここで面白いのは、右の一行に出てくる「心」と「割り切る」の対比である。どうやらこれは精神と理性と並行しているようだ。

むずかしく考える必要はない。

「精神」の方は語源的には「理性」よりも生命的である。「スピリット」は、輪郭が広まるばかりだ。

肉体を生かすもの。生気（昔は息がそれであるとされていた）。精神、霊、心。霊魂、亡霊、幽霊。天使、悪魔、百鬼、活動家、活気、元気。気だて、気質。アルコール。

まずはこんなところである。

この広い意味は、「気」の風景をよく示している。む

ずかしく「精神」と力むから、コチコチになり、哲学は頭が痛くなるなんて逃げ腰になる。ホントウは、哲学とはもっとずっとヤワラカなのである。つまり、これらの広がりを味わうのである。そして、この図柄のなかに、古い時代からの観念の生きた姿を感得する。「元気を出せ」とか「頑張れ」などと現代人が景気づけをする。それも、このような古層からのこだまである。悪霊と神霊とアルコールが同居しているのも面白かろう。

「月が鏡であったなら」とか「もしも月給があがったら」は、日本の都市化が進む段階で、サラリーマンが現われたことを示す。映画の主題歌だった。

というわけで、「もしも……だったなら」は、異世界への開口部をなしている。

入口あたりでストップしたのでつまらない。どうせ入り込むのなら大きな世界に入ってみたい。

さて、他方の「理性」の方である。こちらは、語源的には「分ける」こと。「測る」こと。「正気」であること。などである。

酔っているのではなく、醒めていること。こちらは、「味わう」というよりも、「分別する」方だ。だから「分け」「理性」「道理」というように、どこまでも「ワケ」がつきまとうワケだ。

2

アリスの風景

『ふしぎの国のアリス』は、この「もしも」の世界の数学版である。ちゃんと「ワケ」が示されている。この「ワケ」が。教訓的でないのがよろしい。

自由奔放な空想と言語ゲーム。笑いとどんじゃか騒ぎ。想像力のざわめき。

ルイス・キャロル。本名チャールズ・ラトウィッジ・ドジスン。オックスフォード大学の数学と論理学の教授だった。ルイス・キャロルはペンネームである。それは、よく知られていることだが、本名からの変身によるものだった。まず本名のチャールズ・ラトウィッジ(Charles Lutwidge)をラテン語に直して、カロルス・ルドヴィクス(Carolus Ludovicus)とする。これをさら

にひっくりかえす。Ludovicus Carolus を英語に直すと「ルイス・キャロル」となる。

一八六二年のある夏の日のこと、ルイス・キャロルは、クライスト学寮のルデル博士の三人の小さな娘をつれてテムズ川にピクニックに出かけた。そのとき、まんなかの娘のアリス（当時九歳）にせがまれて即興でつくったのがきっかけだった。

「せがまれて」ということばをさらりと通ってはいけない。その辺でじっくりと腰を落ち着かせて、想像力のかぎりを楽しんでみるべきだ。九歳の少女に「ねえ、何かオハナシして」と「せがまれている」数学の先生の顔の表情を想像してみよう。

すぐに「ウン」と言えず、困ったような、扱いかねているような顔つきが浮かぶ。それでも少女はますます「せがむ」。いいかげんなところでやめてしまったなら、おとなは話をそらしてしまう。少女は経験上、それを知っている。姉と妹も応援に加え、「ねえ、オハナシしてよ」の大合唱がはじまる。

これを避けるには、「オハナシ」を即席でつくる以外はない。そこで、観念したドジスン先生は、寄り切られた格好で、「ではオハナシしてやろう」と応ずる。あの合唱はとたんに消え、静かになる。

ドジスンがその場で語ったのは「地下の冒険」という話だった。主人公は、眼前にいる少女たちをモデルにした。即席の話だからすらすらと進んだとは思えない。途中で、聴き手の少女たち三人は、感心もしたろうが、不平を口にしたり、不満そうな顔つきもしたに違いない。話の腰が折れることもあったろう。逆に合の手を入れるかのように、「ウン、ウン、ソレデ」とか「ソレカラ、ドウシタノ」とか「アア、ヤッパリ」とか、口にしたことであろう。

こういうぐあいに想像力を介して『ふしぎの国のアリス』を読んでみると、妙味が一段と光ってくる。

ドリトル先生の旅

ヒュー・ロフティングの『ドリトル先生』の誕生もこ

れと似ている。

第一次大戦にアイルランド軍の将校として出征したロフティングは、戦場でさまざまな場面を目撃した。たとえば、荷物を運ぶ馬は、重いけがをした場合、射殺されてしまう。人間の場合には手厚く看護される。どこかおかしい。こんなことがきっかけになって、馬と語ることができる名医がいたとしたら——という奇想天外なアィディアが生まれた。

しかし、それが形をととのえるには、大事なきっかけが必要だった。それが彼の子どもたちである。一九一七年のこと、彼は戦地で負傷して、アイルランドに送還される。戦争が終わってからは、一九一九年にアメリカに渡る。この間、定期的に自分の子どもたちに「ドリトル先生」を主人公にした話をきかせていたらしい。息子の名もわかっている。コリンという。毎日、夕方の六時になると、コリンは床につく。そのとき、いつも「ドリトル先生」の話をせがむ。

こういうきっかけは、どこの親にも平等に与えられている。いや、そういう平べったい言い方よりも、どこの親も、その子から「オハナシしてよ」と執拗に迫られるチャンスはかならずあると言っておこう。

「ドリトル先生」、つまり Doctor Dolittle はイギリスの田舎に住む獣医である。住所の名前もふるっている。「沼のほとりのバドルビー」。動物語を「先生」に教えてくれたのはオウムの「ポリネシア」だ。百八十二歳とも、百八十三歳ともいわれている。生まれたのはアフリカ。(いや、ホントはロフティングの頭のなか)。いまでは世界中のこどもの頭のなかに住んでいる。

メスのアヒルの「ダブダブ」。「先生」のうちの家政婦役。お金のことに無関心な「先生」の台所のやりくりに苦心をしている。

フクロウの「トートー」。早耳で有名。数学者。まずは「ドリトル一家」の知恵袋というべきだろう。忠実な飼い犬「ジップ」。

このまわりに、くいしん坊のブタ「ガブガブ」とサルの「チーチー」がいる。この二人は道化役である。食物

に対しては多方興味をもち、書物まで書いている「ガブガブ」は、美容体操をしてやせるように努力している。「チーチー」もそうだ。扮装がお手のもの。

頭が二つに、からだは一つという珍獣「オシツオサレツ」。大変なはにかみや。

境界線の喚起力

「アリス」も、「ドリトル先生」も、オトナなのかコドモなのか、よくわからない。双方が入り組んでいる。今様にいえば、〃クロスオーバー〃であろうか。

物語の方は、おもしろがらせるために媚びてはいない。調子を落してはいない。

いかにも「コドモ向け」というようなところはない。「オトナ」の読み物としても上出来のものになっている。つまり、「オトナ」と「コドモ」の境界線はきっちりときまっているのではなく、出入自由、往還自由なのである。その「自由」はどんな形で出ているか。まず、主人公の「ドリトル先生」。

Dolittle→Do little。いわずと知れた「できぬ」。医者ならさしずめ「ヤブ医者」といったところ。だが、この音のほうはどうか。「ドウリトル」→「ドリトル」。なかなかよろしい。そのよろしき音が、あやしき「ヤブ」の意味をもち、しかも、ご当人は愛にあふれたお人よし。このズレが喚起力をもっているのである。

「ドリトル先生」の物語は、舞台をいろいろなところに移す。アフリカ、郵使局、月、湖、サーカス、動物園。そのたびに、ロフティングは自分でさし絵を描いた。シルクハットをかぶり、太り気身のドリトル先生は、眼が小さい。そのふるまいはコドモに近く描かれている。

さて、その「ドリトル先生」は、一九二二年に出版された『ドリトル先生航海記』になると、少し風貌が変わってくる。語り手は、同じ町に住む靴屋の息子トーマス・スタビンズ（トミー）に移るので（しかも、そのトミーがドリトル先生の助手をして、いまは老人になって、少年時代の思い出を語るという構成になっているので）、「ドリトル先生」に対する評価もそれだけ変わったのか

もしれない。

まず、「ドリトル先生」はいつのまにか「博物学者」になっている。何でも知っている人になっている。その最初の出あいも奇妙なものだった。小柄な、太った人とトミーが雨の日にぶつかって尻もちをつく。

トミーは「ドリトル先生」から「スタビンズ君」と呼びかけられてよろこぶ。いつも「坊や」と呼ばれるのをきらっていたからだ。

このところはまことによく書けている。

3

もしも……の世界

「もしも……だったなら」という発想は、論理的にも、修辞的にも、詩的にも有効である。仮説を立てること、想像力を発揮すること、変幻自在に戯れてみること、のように広がっていく。

『ドリトル先生月へ行く』（一九二八年）においては、語り手のトミーはもう立派な助手になっている。月世界で収集したデータをたくさんもっていて、それをどうまとめようかと考慮中である。ところが、語る相手は科学者ならぬ一般読者に向かって月世界のことをどう語ったらよいのか、トミー（いや、いまはトーマス・スタビンズ、医学博士ジョン・ドリトルの秘書である）は、その語り方を身近な〝友〟を稽古にしていろいろためしてみる。下書きの原稿を犬のジップに見せたら、ジップは、月世界にネズミがいたかどうか、そんなことにしか関心を示さない。ガブガブは、月ではどんな野菜を食べていたか、そんなことばかりをきこうとする。

そこでスタビンズは考える——

人間の注意力はバターのようなものだ。あまり薄くひきのばすと広がりすぎて、何にも頭に残らなくなってしまう。月世界では目にも耳にも頭にも、数かぎりない新しいことが押し寄せてくるのだから。

「もしも……の世界」に入るには、隠喩が巧みに使えなくてはならないようだ。それに「ドリトル先生」のように、コドモのようなすなおな心で新しい問題にぶつか

ること。あらかじめこうだときめてかからないこと。

調べまわること

ドリトル先生の秘書トーマス・スタビンズがいうとおり、ドリトル先生は何でも調べあげていく。そのたびに、先生は少しずつ変わっていく。調べては動物語や植物語をよくおぼえていく。だから、「月世界」のレポートも一方的な観察記録ではなく、「月世界」の生き物たちとの会話の結集である。それはインタビューでもあるし、討論でもある。そのような生き生きした会話である。

ドリトル先生の「会話」は、対象に向かい、それを理解しようとしてやわらかになる過程である。スタビンズは、そのかたわらにいて、ドリトル先生の個性が時折消え、先生がまるで植物や動物の代弁者の役割から、それらになり切る寸前にまで進むのに驚かされている。

同じ「会話」でも、この両者は現われ方において大いに異なってくる。「代弁」はあくまでも「翻訳」だから、ある種のもどかしさがつきまとう。だが、相手になりきってしまえば、「代弁」の段階からもう一歩進み、物皆が語る世界がひらけてくる。

それは詩的な世界だ。

ことばがよみがえらせる世界だ。

ダブダブがあずかるドリトル先生一家の「台所」のやりくり。これは、どんな人も日常見慣れている家計の姿を示している。しかし、この、したたかなアヒルが主人公に入りこむことによって、いわゆる「台所」が何という生き生きした姿で見えてくることだろうか。

詩的世界とはこのような世界だ。

「生き生き」そうだ。その表現は、いまでもひんぱんに使われることばの一つだ。

あまりによく使われるものだから、時にはお題目のように見えないでもない。ある大先生（たしか、ノン・リトル先生とかいった）が講演のなかで、あまりに「イキイキとした子ども」を連発したので、聞いている方には大変ズレた形で「キイキイした子ども」とひびいたと

か。とにかく殺し文句なのである。

連発するのはさけ、ついでにお題目のように唱えるのもやめ、実際に生き生きするように、意気と息を合わせてつくり出す生活を考える方が粋である。

境界の往還

境界のなかでは国境のように、ケンノンなものもある。県境になると、川や山という自然指標がシルシになる。列車で走っていくと、途中に「ここより〇〇県」というような表示もある。国境とくらべると、県境はあまり実在的ではない。

町の境、区域、学区……いろんな「境」がある。昼と夜の境もあるし、内と外とのサカイもあり、人と人とのサカイもある。民法の中でいちばん奇態に思えるのがサカイをめぐる規定。まことに、人間はサカイをめぐってトラブルばかりつくり出しているようにも思える。だが、境にはふしぎな喚起力もある。

「カイワイ」「境内（けいだい）」「露地」「この世とあの世」「コドモとオトナ」……これらの「サカイ」はどんなものなのか。スイスイと通れる境もある。悶々として、やっと通る境もある。変身、変態、脱皮を重ねて通る境もある。「行きはよいよい、帰りはこわい」という境もある。

このような「境」を放っておいて「生き生き」だけを唱えるのはもったいない話だ。いや、もったいないではとどまらない。「ノン・リトル先生」たちは、コドモを「コドモ」というがっちりした壁でかこってしまう。「ホンライ子どもは純なのであります」などともおっしゃる。

でも、一次方程式あるいはワン・ショットではうまく解けないのが子どもの世界だ。何しろ、そこでは時とともに風景が変わっていく。どこをもって「ホンライ」と見なしてよいのか。こちらもいっしょに動いていくのだから、こちらの「ホンライ」も変わる。ホンライはホンライ動的なのだ。

そう考えるとき、この風景ははるかに生き生きしてくる。

（名古屋大学）